

BUNGEI Collection KAWADE BUNKO

Author Masayo Yamamoto

山 本 昌 代

Title

応為
坦為
録

Publisher

KAWADE Shobo Shinsha

2-32-2 Sendagaya, Shibuya-ku, Tokyo, Japan Telephone-03-404-1201

応為坦坦録



著者 山本昌代

一九九〇年三月二六日 初版印刷
一九九〇年四月四日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-33-1
☎ 〇三-四〇四-八六一一 (編集)
〇三-四〇四-一二〇一 (営業)
振替口座 (東京) 〇-10802

デザイン 栗津潔
カバー装丁 菊地信義

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1990 Printed in Japan

ISBN4-309-40268-2



kawade bunko

河出文庫

応為坦坦録

山本昌代

目次

応為坦坦録

解説

川村二郎
二五

五

応為坦坦録

「仙人せんじんッていうのはどうしたらなれるもんだろうなあ」

版元の山崎屋からの帰り道、お栄えいは吾妻橋の橋の半なかほどでフと足を止めると、蕩蕩と流れる大川を見てため息をついた。

目に青葉の五月の風が、麻裏草履の素足に快く吹きつける。空には白い雲がのびのびと広がって浮いている。お天道さまは機嫌よく世間を照らしている。世の中の万物が手を合わせてありがたがるようなこの天気、しかしお栄は存外ぐんがい無頓着むとんちゃくであった。天気ばかりか、ついさっき山崎屋が手渡してくれた紙包みの中の金の高たかにも、お栄はやっぱり無頓着であった。

高田蘭山とかいう人の、お栄はこの人の氏素性をまるで知らないのであるが、その人の書いた「女重宝記」という草双紙に絵を入れる仕事を、ちょうど一ヶ月前に山崎

屋の主人から頼まれた。試しに一、二枚描^かいて、蘭山さんに見せてくださいと山崎屋に持っていくと、山崎屋は、

「わざわざ来てもらわなくッてもこッちは勝手が知れてるし、蘭山さんの方にもあんなの絵は見せてある。ほら、このあいだ描^かいてもらった雪景色の芸者の三枚続きのやつだよ。それでむこうがこれならといったんであんだから心配することはないよ」

と親切そうに笑ってみせた。

「そうですか」

お栄は納得して素直に引き下がった。

山崎屋はお栄の顔を見るたびに、その美人絵の達者なのをほめた。

「お父ッつあんより上だよ、こりゃあ」

大きな^おぬぎの実のような目をいっそう丸くして、いつもこういうのを忘れなかった。

人にほめられたからというわけではなしに、お栄もやっぱり自分の美人絵には自信があった。好きこそものの上手というくらいだから、もちろんお栄は美しい女を描く

のが好きであつた。お栄は意氣でいなせで鉄火な女を好んで描いた。潰し島田に縋の羽織、じれった結びに唐棧の半纏、そういうふうな江戸前の瀟洒な女たちを、お栄は夜の川面や紗の蚊帳の向こう側や月明かりの雪の中においた。

けれども、ただ好きだから、ではいい切れないモヤモヤした気持ちがお栄の胸の奥にはあつた。役者絵は、これははじめから問題外であつた。どんなに気に入らない役者の顔かたちも、かすかには似せて描かなければならない。衣裳も背景も、それから絵の持つ雰囲気も芝居から離れてしまつては意味がない。お栄は生まれつき、ああだこうだと強制拘束されることに、ほとんど感謝の念を示さない人間であつた。そろそろ四十に手の届く今になつてもその癖は抜けていないので、他の絵師が今度出す芝居の絵のことをあれこれ相談しているのを傍で聞くだけで、なんだかくたびれてしまうのである。まして芝居というものに米粒ほどの興味も同情もないのであるから、正直をいえばまったくのところ描く術がないわけなのであつた。風景は、風景絵は逆立ちをして天井を這つても、こればかりは父親に、今年八十四になる父親にかなわないのをお栄は自分でよく知っていた。真似はほぼ完璧にはできても、自分の腕でそれを越えられることはない、誰が論したのでもなくお栄の勘がお栄にそう告げたのである。

一生代筆屋で終わるつもりならそれもそれでいい。けれど仮りにもてめえの画号を絵の端^{はし}っこに掲げるいッぱしの絵師になるんなら、ここは一番というところがなくッちゃあ駄目だ。なにかひとつてめえの浮かぶ瀬がなくッちゃあ駄目だ。こればかりは北斎先生じゃいけない、応為さんをお願いしますッて、人にいわせるくらいのものがなくッちゃあなあ——お栄は頭の上の空を見ながらそんな思いにふけたこともあった。父親が他の絵に比べて美人絵があんまり得意でないから、自分がここぞとばかり精を出すようになったのか、けれども今思い返してみれば、お栄にはハッキリとはわからないのであった。あれこれと考えていると決まって頭の中が混乱してきて、雨雲がかぶさったような重ッ苦しいやな気分になる。だから荷物のガラクタを捨てるみたいに頭を無闇に振る。そうするとものごとく空ッぽになって涼しい風が吹き抜ける。お栄にとって考えるとか物思いにふけるとかいうのはなべてこの調子なので、いつてみれば無駄と無益以外のなものでもないのである。

「あたしにはホントは頭はいらない。勘と手と足がありゃあ生きていける」

お栄はよくそんなことを真顔でいって人に笑われた。

仙人になるにはどうすればよいかという問題は、最近お栄の本当はいらないはずの

頭に突然降って湧いた黴のようなものであった。なんでいきなり仙人になりたくなつたのか、お栄はやっぱりハッキリとはわからなかった。ただ遠い唐からの国の深山幽谷に、決まって白いビラビラした衣をまとして住んでいる土気色の萎びた風情の人間に、お栄は遙かな夢を感じたのである。霞を食って生きているというのも、雲に乗って空を飛べるというのも、自分の姿を消したり他のものになつたり、ないものを目の前に出したりというのも、みんな夢のような話だとお栄は思った。聞くところによれば仙人というものは魔性化生の類ではなく、もとは普通の人間なのだそうだ。それが修行次第で、空も飛べれば霞も食える。何にも世の中のためになることも人を喜ばせることもしないのに、絵にも描かれる。家うちもなくて済むから、汚れたの飽きたの借金ひとえが積つたのと、引ッ越す気づかいもいらぬ。着物も一年中白いビラビラ一枚で、仙人が着る物を汚したという話は聞いたことがないから、替えもいらぬ。おそらく単衣ひとえも裕もないのであろう。ああ、どこをとって考えてみても仙人はいいなあ——お栄はやっと川の水から目を離すと、渡りかけた吾妻橋の上を、またとぼとぼとあてもないように歩き出した。

「仙人になる法」と題した本を、お栄は二、三日前、佐賀町の千寿賀屋という、草双

紙の類ばかりを並べて売っている店でみつけて買った。へたくそな絵が三つ四つ入っているだけであとは字ばかり、しかもところどころに漢文の形を入れているので見た目には頼もしい感じの本であったが、帰って来て念入りに読んでみると、支那のどここの奥山にはしかじかの仙人がいてかくかくの仙術を披露するといったことが詳しく書いてあるだけで、仙人の修行法とかそういう素人向けの説明はどこにもないのであった。ただ支那の何々山という山の地図がついていて、ここにはこの仙人が住んでいるということやこの仙人とこの仙人は行き来があるといったことが、ばつ印や矢印で丁寧に示されているのである。お栄は別に腹も立てずに、かえっておもしろそうに丸一日その本を読み耽っていたが、読み終わってしまふと、自分の問題は何ひとつ解決されていないのに気がついて、ため息をつくのだった。

「だいたい日本人に生まれたのがそもそもの間違いだ。もしあたしが唐の国の人間だったら、仙人の事情もよくわかったろうし伝手^てもあったかも知れない。ああ残念だ残念だ」

お栄はそういいながらも、やっぱりまだスッパリとは諦められずにいた。

橋を渡り切るとお栄は、ちょッと土産に桜餅でも買って帰ろうという気になって、

家とは反対の方角に足を向けた。そうして鉄蔵に十個、あたしは二つと頭の中でゆっくり足し算をしながら三囲みめぐり稲荷の鳥居の横を過ぎた。

「お栄さん、何度もいうようだけど、あんた、やっぱりもつと自分の名前で絵を描いたらどうだね。こないだ鶴屋の与吉さんに会ったけど、あんたの絵のことを随分とほめてたよ。この前描いてもらったのもよく売れて、評判もかなりなもんだったし……」

「どうも、そういつていただくと……ありがとうございます」

山崎屋の主人が、腹からお栄のことを思ってくれるような口調でいうのが、お栄にはかえって辛かった。

「そりゃああたしだって応為という立派な……立派かどうかは知らないけれど、ちゃんとした画号があるんだから自分の絵は描きたいです。でもそっちの方に力を入れればなしじゃあ、なかなかおまんまの方がむずかしくなッちまうんですよ」

お栄はこういいたい気持ちを抑えて黙った。たとえばお栄が絵本の絵を描くとする。一丁あたり版元のくれる画料はせいぜい金二朱どまりである。同じくお栄が描いたものでも応為の名でなく北斎と書いて持って行けば、まあ、だいたいは向こうから受け

取りに来るけれども、金一分は堅いところ、つまり四倍の金がとれる計算になる。四分の一と四倍とどちらをとるかの段になれば、やはり酒も飲みたい美味いものも食いたい、絵のことはしばしば頭の外へ抜けて行ってしまうのだった。お栄はそんな自分が時たま妙に情けなく思えたりもするのだが、天氣がよければ心の憂さもじきに晴れるのが決まりであった。

「鉄蔵。桜餅買って来てやったぞーッ」

口のききかたが極めて粗暴なこの年かきの娘は、父親をつかまえてお父ッつあんともお父うとも、ちゃんとも父さんとも、ましてや冗談にも父上などと呼んだ例がない。小さい時分から、自分で気がついた時にはもう「テツゾー」と怒鳴っていた。鉄蔵も「テツゾー」と呼ばれて別に腹も立てなければ、「お父ッつあん」と呼べとも教えなかった。

娘の方は父親を名前で呼びつけにするけれども、逆に父親の方は自分の娘を「お栄」とその名で呼んだことがない。用事のある時は決まって「オーイ」と呼ぶ。返事がなくてもやっぱりまた「オーイ」と呼ぶ。お栄が家にいないのにいつまでも「オー

「オーイ」と呼んでいて、隣の人が戸口に顔を出したこともあるけれど、鉄蔵はそんなことには一向頓着しないのである。またお栄の方も「あたしにはちゃんと名前があるんだから名前で呼んでくれろ」といった抗議をしたことがない。初めて自分の描いた絵を自分の名前で買ってくれると版元がいつて来た時、鉄蔵がさすがに気づいて画号はどうするとお栄の顔を覗き込んだが、お栄はふいに頭に浮かんだように目を上げて、

「オーイにしよう」

といったのである。それくらいだから、お栄は、別のことにしてもくよくよ思い悩んだり、細かい心配に気を回したりといったふうなことは何ひとつとしてなかった。鉄蔵とても同様で、この親にしてこの子と人のいう通り、似た者どうしのこの親子はさしてひどい喧嘩をするでもなく、鷹揚に、太平のその日その日を、ひとつ屋根の下で気儘に暮らしているのであった。

「少し小さくなったんじゃないか。これ」

「ふん。そうかね」

文句をいいながらも、鉄蔵はうまそうに舌鼓を打って桜餅をパクついている。驚く